

エドガー・ドガ作《コンコルド広場》についての一考察

恵崎麻美（関西大学大学院）

エドガー・ドガ（Edgar Degas, 1834-1917）が、1876年に制作した《コンコルド広場》（エルミタージュ美術館）は、人物の体が画面の縁で切り取られていること、その体の向きや視線に統一性がないことなどの人物配置に、注目すべき特徴がある。

彼が写真を使用したことは広く知られていたことから、この画面は、街中でカメラのシャッターを押したときに、たまたま関係ない人が写り込んでしまったスナップ写真のようだと指摘がなされ（Aaron Scharf, 1968）、写真に着想を得た作品だと考えられたこともあった。

他方、ここに見る「スナップショット的」表現について、写真以外の影響を指摘する議論もあった。たとえば、着想源に日本の浮世絵をあげる小林太市郎や、カリカチュアをあげるジョエル・アイザックソンらの研究は、その代表的なものである。さらに、《コンコルド広場》が描かれた当時、スナップ写真を撮ることは技術的に困難であったとの意見が提出されることによって（Kirk Varnedoe, 1980）、1980年代以降、写真を着想源とする定説が大きく見直されるようになった。

このように、着想源の再検討が進められた、さしあたりは、他のイメージとの構図の類似や、その影響の可能性の指摘という、初歩的段階のアプローチに終始していた。というのも本作は、1995年のエルミタージュ美術館の展覧会で公表されるまでは、第2次世界大戦中に焼失したと考えられており、粗悪な写真図版をもとに研究が行われていたからである。

しかし、1995年に《コンコルド広場》の存在が明らかとなって以降、詳細な調査を通して、新事実や新資料が発見されている。また、印象派研究のリヴィジョニズムの流れの中で、ここに描かれているのが単なる通行人ではなく、画家と親交のあったルピックとその娘、および彼の飼い犬という、作品の図像に関わる問題も注目されるようになっていく。

本発表では、エルミタージュにおける最近の調査報告に基づく新知見を手掛かりに、作品分析を行う。そのことを通して、スナップ写真や浮世絵やカリカチュアからの「影響」というよりも、むしろ画家が、古典主義的ともいえる自らの制作理念に基づき、特定の人物の動作や表情を綿密に観察し、習作やデッサンを重ねたことで、本作品の特徴的な画面を生み出したのだと指摘する。こうしてさりげない日常の一コマにふさわしい人物像を作り上げ、そこに人物の地位や職業などの社会性を示す外面的特徴を盛り込みながらも、画面全体としては、それぞれの内面に潜む人物間の心理的距離感をも描き出した。そのために、意図的に体の向きや視線の統一感を取り除き、画家が肖像を描く場合に加えがちな自らの感情を投影させることもなく、まるで切り貼りするように人物を配置したのである。こうしてできあがった画面に、無関係な人間が行き交う都市の「スナップショット的」情景が出現したとしても、それは当時の写真とはまったく異なる生成過程を経た結果であったと結論付ける。